様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０２０３

研究課題名（和文）ジェームズ・ステュアート未発表財政論草稿群の研究

研究課題名（英文）Research on Sir James Steuart's unpublished manuscripts on finance

研究代表者
古谷　豊（Furuya, Yutaka）

東北大学・経済学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：００３７４８８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：この研究ではアダム・スミスとともに経済学を個別科学として体系化したステュアートの、財政論に関する草稿９点を研究資料として整備し検証を進めた。とりわけステュアートが亡くなる直前に書いた長文の財政論解説草稿は、研究上極めて重要である。
ステュアートは経済と政府との関わりや貨幣の役割などについて古典派経済学と対照的な体系を樹立し、ケインズなど後の貨幣的経済理論のプロトタイプであるにもかかわらず、大量の草稿が未解読・未公刊のままとなってきた。これら未公刊草稿を研究資料として整備する作業はこの１０年間、日本が主導して進めてきた。

研究成果の概要（英文）：In this research project I have examined Sir James Steuart's nine unpublished manuscripts relating to the theory on finance and published them for the first time. The most important manuscript among them is "Correspondence on French Finance" in which Sir James gives Sir George Colebrooke a lengthy commentary on his _Principles of Political Economy_.
This research project is a part of a larger project of preparing a manuscript collection of Sir James Steuart which I have been working on for the last ten years.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説、経済思想

キーワード：ステュアート　草稿研究　重商主義　経済学史　クセノポン　クセノフォン

１．研究開始当初の背景

（１）ジェームズ･ステュアートの『経済学原理』（1767 年刊、以下『原理』）はアダム・スミスの『国富論』（1776 年刊）とともに経済学を独立の個別科学として体系化した。両著は対照的な体系を成し、後者が古典派経済学を拓く一方で、前者は重商主義経済思想の理論的体系化を果たしたものと整理されることもある。他方で今日では、後者が実物的な体系である一方で、前者は貨幣的な体系であるという側面が重視されるようになり、ステュアートの『原理』の経済学史的な意義の重要性が高く評価されるようになってきている。

（２）しかしステュアート研究を進める上では多くの草稿資料が未公刊のままであるという、研究資料整備の立ち後れが決定的な障碍となっていた。その背景にはステュアート研究そのものが浩瀚な『原理』の体系の枠内で進められている状況であったことに加えて、ステュアートの草稿資料の大部分を占める Coltness papers と呼ばれる草稿群を、子孫がプライベートに保有してきたということがある。この草稿群がエディンバラ大学図書館に寄贈されて、本格的な草稿研究の環境が整ったのは 1988 年になってからのことである。

（３）その後、ステュアートの草稿研究は、ステュアート研究の蓄積も多い日本がリードする形で進められていった。とりわけこの十年間はこの研究補助事業の代表者古谷豊と奥山忠信のもとで、計画的に進められてきた。

２．研究の目的

（１）最大の目的は未公刊の重要草稿、Correspondence on French Finance; from Sir James Steuart to Sir George Colebrooke.を研究資料として整備することにあった。

ステュアートは主著の『原理』を刊行して以降、『原理』に直接関係するものとしては二つ、草稿を作成していた。一つは『原理』第二版に向けた加筆修正である。1772 年 3 月 20 日にステュアートが国王ジョージ三世に謁見した際も、今はなにか執筆しているのかという国王の質問に対してステュアートは「すでに書いたものを修正しているのみです」と答えている。ステュアートは最晩年までこれらの加筆修正が施された『原理』の第二版を出すことを考えていたが、存命中はついに日の目を見ることはなかった。しかし彼が 1780 年 11 月に歿すると、息子はこれらの加筆修正を『原理』1767 年版に丁寧に清書したものを作成して、翌 1781 年にステュアートの若いときからの親友スリープランドに形見として贈った。この現物はロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの図書館に所蔵されている。さらにそののち、1805 年に息子とジョージ・チャーマーズがステュアートの著作集を編纂する際に『原理』の文章にこれらの加筆修正が反映され、ようやくステュアートの意図に沿った実質上の第二版となった。

『原理』に関してステュアートが作成したもうひとつの草稿が『原理』の財政論にかんする論考、Correspondence on French Finance であった。これは彼が歿する直前に彼の友人ジョージ・コールブルックからの質問に答える形で書いたものである。この 1780 年 10 月に書かれた返信書簡は 21 の論点にわたる、25 ページ・6,000 ワード超の論考となっている。上述の『原理』の加筆修正文とともに、ステュアートの研究を進める上でなくてはならない重要な基礎文献である。しかしステュアート草稿研究の遅れから、これまではエディンバラ大学図書館 CRC を訪れる以外にアクセスの方法がなかった。一刻も早い研究資料としての整備が求められていたのである。

（２）草稿を研究資料として整備する作業は多くの付随調査を必要とする。ステュアートの書いた Correspondence on French Finance は、単体として活字にしても意味が通らない。なぜならこれはコールブルックからの書簡とそれに同封された「フランスの歳入についてのエデン氏の説明に対する意見書」への返書として書かれているからである。この二点はステュアートの論考と対になるものとして、合わせて明らかにする必要があった。またこれらの内容を適切に検討するためにはこの往復書簡の背景や人間関係についても最低限の情報がなくてはならない。そこで同時期にステュアートからコールブルックの娘に書き送られた書簡 5 通（後に 4 通と判明）も関連する資料として扱わねばならなかった。

（３）財政論についてのステュアートの草稿では、もう一点、重要なものがあった。ステュアートが『原理』を執筆する過程で作成した、古代の哲学者クセノポンの作品「政府の財源」への注釈草稿である。これもこの機会に是非明らかにされるべきであると判断した。

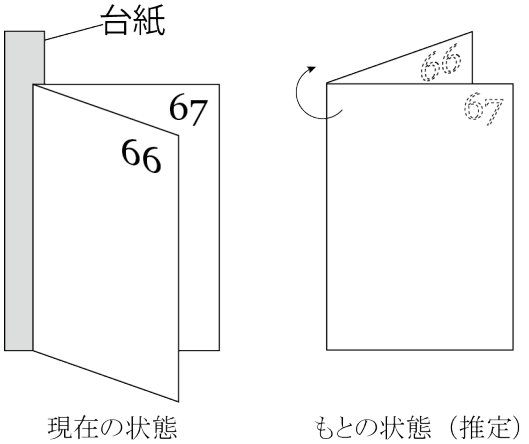
以上、ステュアートの財政論にかんする未公刊草稿 9 点（後に 8 点と判明）を明らかにすることがこの研究補助事業の目的であった。

３．研究の方法

（１）第一義的には、草稿原本を所蔵する機関の協力を得ながら、粘り強く草稿を一文字一文字辿っていく作業となる。筆跡や紙の状態など入手しうる限りの情報から再構成していくことが要求される。

例えばステュアートからコールブルック

の娘に書き送られた書簡については、一見したところでは5通の書簡のように見えたものが、内容を精査し、草稿紙片の状態や筆跡を調べ、草稿の来歴について周辺情報を集めるなかでこれが実は5通ではなく4通の書簡であることが判明した。



まずこの草稿はステュアート自身がコールブルックの娘に書き送った書簡の原本ではなく、1800年前後にコールブルック家の方で筆写したものを作成してジョージ・チャーマーズという古物研究家に送ったもので、それがチャーマーズの死後にデヴィッド・レインという古物研究家が入手して台紙に貼り付け冊子にしたと推定することができた。そうすることで次に、この草稿が台紙に貼り付けられるタイミングで、紙を折る向きが逆のまま貼られてしまったこと、そのことで4通の書簡が5通のように見えたこと、を明らかにすることができた。

（2）草稿を研究資料として公刊する上ではそれ以外にも実に多くの付随調査が必要となる。例えば今回扱った草稿のいくつかは日付も、場所も記載がなかった。このような基本的な文献情報は最大限、明らかにすることが必要である。

例えばステュアートがコールブルックの娘に書き送った書簡は日付の記載がなかった。そしてこれについてはグラスゴー大学の故アンドリュー・スキナー教授が1780年の9月、10月に書かれたものであると述べ、それが定説になっていた。けれども草稿内容を精査すると、それではどうしても矛盾が生じてしまう。そこでロンドンとエディンバラの古文書資料館で関連資料を調査し、スキナー教授の説の形成過程と突き合わせるなかで、①この4通の書簡は二ヶ月の期間で書かれたものではなく最低でも三ヶ月半の期間にわたって書かれたものであること、② それも1777 年の前半±数ヶ月に書かれたものであること、と同定することになった。

4．研究成果

（1）ステュアートの Correspondence on French Finance を関連草稿とともに公刊することができたのが、もっとも重要な貢献である。これからのステュアートの財政論に関する研究はこの資料を踏まえることなく進めることはできないであろう。このことはステュアートの経済学体系における財政論の重要性を踏まえるとなおさら大切なことである。

（2）クセノポン「政府の財源」へのステュアートの注釈草稿を公刊できたこともステュアート研究を進める上で大きな成果であった。『原理』のなかで経済理論を展開する際、ステュアートは繰り返し近代の経済と古代の経済を対比させることによって論理を浮かび上がらせるという方法を用いている。そしてその際、ステュアートが古代について参照した文献のなかでもっとも重要なものがこのクセノポンの「政府の財源」であった。ステュアートは『原理』のなかで「政府の財源」を「このもっとも貴重な論説」（vol. 1, p. 460）と述べ、古代人の経済について「古代であると現代であるとを問わず、私がこれまでに読んだもののどれよりも多くの示唆がそれから得ることができる」（ibid）という強い表現でこの文献の要性を強調していた。

（3）『原理』の形成過程について以下の点を明らかにすることができた。

① クセノポン「政府の財源」へのステュアートの注釈草稿の検討を通して、『原理』の本文が1759年の初稿から1767年の完成稿に至る過程で、古代人の経済に関して 83 ワード削除され 805 ワード加筆されたこと、1805年の第二版ではさらに268ワード加筆されたこと、を示した。

② 1767 年の『原理』へと結実するステュアートの研究はいつ、どのようにはじめられたのかについては従来、次の二つの典拠しかなかった。一つは『原理』第1編第2章の「ここは 1756 年に書かれたものである。その当時ミノルカ島がフランス軍に占領された」という記述で、もう一つは『原理』の末尾の「私が最初に立てた計画にしたがって、私は今この研究を完結することができた。それは幾度にもわたる健康の悪化とたび重なる逆境の打撃とによって心ならずも妨げられたとはいえ、みっちり 18 年にわたるこころよい精励の所産である」という記述である。

Correspondence on French Finance の草稿はこの研究の端緒について初めて、ステュアート自身の言葉で詳しく我々に伝えてくれている。

（4）コールブルックからステュアートへの書簡とそれに同封された「フランスの歳入についてのエデン氏の説明に対する意見書」は、『原理』が当時の知識人・専門家にどのよう

に読まれ扱われたのかについての具体的な事例を二つ提供してくれている。とりわけ興味深いのは『原理』の内容が無断借用されているという事例であろう。

コールブルックとステュアートとの往復書簡が交わされた時期はアメリカ独立戦争の最中で、フランスやスペインがアメリカ植民地を支援してイギリス本国と戦っていた。そのようななかウィリアム・エデンの *Four Letters to the Earl of Carlisle* が 1779 年 11 月に出て評判となった。コールブルックはそのフランス財政についての分析をステュアートの『原理』の記述と照らし合わせて、これは『原理』から借用しているにもかかわらずそのことを明示しておらず不誠実であるとステュアートに書く。ステュアートはそれに対して「エデン氏が私の本から借用しているというあなたの発見はその通りだろうと思います。（中略）彼があのように書くにあたって、私の本以上の典拠は手にしていなかったと確信しています」と答えている。

（５）草稿を研究資料化する調査過程で以下の点についても明らかにすることができた。

① 草稿資料の作成過程、チャーマーズのもとに至る経緯。
② レイン・コレクションに収められるに至る経緯。
③ 『原理』体系の国際的特性の背景としての、ステュアートの欧州大陸での生活の実情。
④ コールブルックとステュアートとの関係。ステュアートが 1772 年に『ベンガル鋳貨論』をまとめるとき、その依頼主ではなかったかと推定した。
⑤ ステュアートからコールブルックの娘への書簡の数、時期、書かれた場所について。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 古谷豊"Steuart on Xenophon's *Ways and Means*" 『研究年報　経済学』第 74 巻第 2 号、67-80 頁、2014 年 近刊、査読有
② 古谷豊「ジェームズ・ステュアート草稿：ステュアートの財政論についての論考」東北大学大学院経済学研究科 Tohoku Economic Research Group Discussion Paper No. 322 号、1-24 頁、2014 年、査読無
③ 古谷豊「ジェームズ・ステュアート草稿：コールブルック嬢への書簡」東北大学大学院経済学研究科 Tohoku Economic Research Group Discussion Paper No. 321 号、1-17 頁、2014 年、査読無
④ 古谷豊「ジェームズ・ステュアート草稿：ジョージ・コールブルックからの書簡」東北大学大学院経済学研究科 Tohoku Economic Research Group Discussion Paper No. 320 号、1-15 頁、2014 年、査読無
⑤ 古谷豊「ジェームズ・ステュアート経済学準備草稿：クセノポン『歳入論』への評注」東北大学大学院経済学研究科 Tohoku Economic Research Group Discussion Paper No. 288 号、1-17 頁、2013 年、査読無
⑥ 古谷豊、解説「温経知世　経済学者の思想と理論　ジェームズ・ステュアート」、『エコノミスト』90 巻 13 号、50-51 頁、2012 年、毎日新聞社、査読無
⑦ 古谷豊、書評「青木裕子『アダム・ファーガスンの国家と市民社会――共和主義・愛国心・保守主義』」、『経済学史研究』54 巻 1 号、124-25 頁、2012 年、査読無

〔学会発表〕（計３件）

① 古谷豊“Steuart on Xenophon's *Ways and Means*”，第 44 回経済思想研究会、2013 年 11 月 3 日、東北大学
② 古谷豊「18 世紀の信用貨幣論：ジョン・ローとジェームズ・ステュアート」、経済学史学会第 77 回大会、2013 年 5 月 26 日、関西大学
③ 古谷豊「アダム・ファーガソンの市民社会概念」、第 36 回経済思想研究会、2012 年 2 月 5 日、東北大学

〔図書〕（計１件）

① 古谷豊他『貨幣と金融 ―歴史的転換期における理論と分析』、社会評論社、2013 年 4 月、共著、383 頁（254-273 頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

http://www.econ.tohoku.ac.jp/~furuya/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

古谷　豊（FURUYA, YUTAKA）

東北大学・大学院経済学研究科・准教授

研究者番号：００３７４８８５

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：